
最初で最後の

みえさん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最初で最後の

【Nコード】

N0800S

【作者名】

みえさん。

【あらすじ】

マフィアのボスの所で捉えられていた日本人の少年久住洋一は大使館で保護をされた。

しかし再び騒動に巻き込まれガイルと名乗る男の誘いでテロ組織「黄金の翼」に入ることになった。リーダのレイアという少女は彼と同年代の少女で……

同じ年代の男の子と向き合うのは酷く奇妙な感じがした。

これだけ大きな組織になのだから、もちろん彼女と同年代の人間はいる。だが、その誰もが血に慣れ始めたような、興奮しているような気配がするのだ。

それなのに彼からは特別そんな気配は感じない。

仲間が拾ってきた彼は間違いなくこちら側の人間だ。でも、その特有の気配はない。学校のカフェでたまたま相席になっただけの男の子と一緒にいるかのようにだった。

逆にそれが得体の知れないものと向かい合っているかのように気持ちが悪かった。

レイアは眼帯の位置を直して立ち上がった。金色の髪を持つ少女の片目は光を失って久しい。焦点の定まらない視線では周囲が気にするために眼帯を付けるようになったのだが、あまり慣れないものだ。

北欧混じりの東洋人の少年はその眼帯を興味深そうに見つめていた。

「紅茶でいいかしら？」

ロシア語で尋ねると彼は笑って答える。

「ジャムを入れた？」

「好みじゃないかしら」

「玉露が一番好きだけど、贅沢は言えないね。ジャムは入れないで」

「分かったわ。……ギョクロって？」

彼はロシア語から英語に切り替えて説明する。

どちらも母国の言葉のように慣れた発音をしていた。

「日本の高級茶だよ」

「今度は用意しておくわ」

「今度があればね」

彼は肩を竦めた。

日本人の血が流れているせいなのか、彼は少し幼く見える。初めは十代前半くらいだと思ったくらいだ。ただ彼は日本人特有の黒髪やダークブラウンの瞳を持っていない。だから年齢はもちろん、国籍さえ不明に見える。

実際、今彼の国籍はどの国にも存在しない。

「ヨーチは何力国語を話せるの？」

スペイン語で尋ねるとやや訛りのあるスペイン語が戻ってきた。

「結構沢山。お姉さんも結構沢山だね」

母国語に直してから答えるのではなく、彼の口からは自然に言葉が出ていくように思えた。大人になってから言語を覚えようとする頭の中で母国語に変換してから考えるのが常だ。幼い頃に覚え、使い続けなければここまで流暢な言葉は出てこないだろう。

数力国語に慣れたレイアでさえ、思索する時は英語で考える。彼の語学力はどの国の言葉も彼女のそれを遥かに凌いでいた。けれどもかれは最近になってこの辺りに来ただけで日本からほとんど離れた事が無かったという。一体どんな生活をしてきたのだろうか。

「私は仕事柄ね。……日本人はみんなそうなの？」

まさか、と彼は日本語で答える。

「僕は特別。いつかどこかに逃げようと思っていたから」

「逃げる？」

「日本から」

彼女はテーブルの上に紅茶を置き、首を傾げた。

嘘を言うつもりはないらしい。だが、全て話す気も無いことが短い言葉から知れる。人の良さそうな微笑みを浮かべているのに、やはりどこか得体が知れない。

テーブルに置かれた二客のティーカップが同じように湯気を立てる。彼は並べられた紅茶の左側を手にとって自分の方に引き寄せた。くん、と鼻を鳴らし、優しそうな笑みを浮かべる。

「ああ、紅茶は分らないけど、良い香りだね」

面白がるようにフランス語。

レイアは向かい側に座って紅茶を引き寄せた。

「ロハがこだわっているのよ」

「あの眼帯銀髪の兄さん？」

「そうよ、良い紅茶だから、ジャムを入れて飲むと怒るの」

紅茶に口を付けて彼は笑う。

「だからいないうちに？」

「ええ。結構美味しいのよ」

レイアはジャムの入ったビンからティーカップに数杯移し入れる。フルーツジャム独特の甘い香りがふわりと広がった。

「ロハさんを出て行かせたのは飲みたかったから？ それとも、僕と二人になりたかったから？」

「両方ね」

彼女はイギリス英語で答えた。その言葉が一番彼女が慣れている言語だった。

「少し無駄話をしたかったの」

「殺される危険性があっても？」

彼はポケットに手を入れると素早く彼女の顔の横にナイフを突きつけた。

少女は顔色一つ変えずに彼を見つめていた。

甘い香りのする紅茶をゆっくりと飲む。

「早いわね」

「慣れているね」

お互いほぼ同時に言った。

どちらの表情も緩く、ナイフを突きつけられている少女と、突きつけている少年のものには見えなかった。

それでも彼が彼女を殺す事が出来るのが分かる。

平静を装いながらも彼女の背には冷たいものが落ちた。

「ここで君殺したら、僕も死ぬだろうね」

今の彼は恐らくレイアを「もの」にしか思っていない。

まるでひび割れたグラスに力を込めると同じくらいに簡単に彼女を壊してしまうだろう。恐怖が逆に彼女を冷静にさせた。

彼は虫も殺せないような微笑みの下で、ひび割れたグラスがまだ使えるのか、もう水が漏れてしまっただけ使えないのかを考えているのだろう。

彼女はティーカップをテーブルの上に置き、彼の問いに答えた。

「ええ、確実に」

「その眼帯の下、いつから？」

「ずっと昔よ。と、言っても二十年も前の話ではないけれどね」

彼女はにこりと笑う。

冗談を言うのは余裕があるからだろうか。それとも逆だろうか。

彼はナイフを無造作に上側に投げる。

とん、と音がして天井に突き刺さった。

「あのナイフ、あげるよ」

「随分と、気の利いたプレゼントね」

「ついでに久住洋一の名前も」

「……それはいい意味で取って良いのかしら」

「もちろん」

少年は笑ってソファに座り直した。

「あなたは、戦争がしたいの？」

「違うよ。……君と僕は真逆にいるだけ。うらやましいんだよ、君が」

彼はジャムのビンを取った。

「だからね、同じ理想を求めてみようと思う。そうすれば見つかる気がするから」

「何が？」

「答えが」

彼はそっとジャムを注ぎかき混ぜた。

紅茶が甘い香りに変わる。

それに口をつけて、彼は首を傾げた。

「思った通り、変な味」

「そう？」

「最初に最後にするよ。……ごちそうさま」

彼はカップを置いて立ち上がる。

「ヨーチ」

「うん？」

「謎かけをされているみたいだね。日本人はみんな、あなたみたいなのかな？」

彼はにこりと笑う。

「僕は特別」

「そう」

「……僕は」

「え？」

彼は少し考え込んで、独特なイントネーションを含む言語で言った。

「僕は色々な人の答えが見たいんだ」

少女は首を傾げた。

「……今の、何語？　なんて言っただの？」

「秘密」

洋一は笑って扉を開いた。

外に出て、扉を閉じ、彼は手のひらを見つめた。

大使館での一件があり、洋一はガイルと名乗った男に誘われるままにここに来た。彼は洋一の事を少し勘違いしていただろう。彼が思うほど洋一は複雑でも単純でもない。力を貸して欲しいという彼の言葉を少し気に入っただけのことだ。

そして彼がそこまで傾倒する彼女と話をしてみたかった。

一瞬でも彼女が素の顔を見せていればナイフは今頃彼女の頸動脈を切り裂いていただろう。だけど、彼女は彼が勝手に仕掛けた賭け

に勝った。

彼女はただ彼が敵になるか味方になるかを考えていただけだ。その証拠に好意的な態度を示しながらも眼帯の奥で見えない瞳はずっと洋一を睨んでいた。

彼女の理想に共感している訳ではない洋一が、だから彼女に協力する気になったなんて誰に話しても理解してもらえないだろう。きっと別の意味に取る人間の方が圧倒的だ。

だけど、そんなのどっちだって良い。

「……探してた答え、見つかるかな」

彼は日本語で呟いた。

実際「答え」を見つけないのか分からない。答えを見つけて納得するのもがっかりするのも結局は満足出来ない気がするからだ。

ならば答えは見つからない方がいい。

「ま、退屈はしないだろうけど」

ここは沢山の人がいる。

色々なものを抱えた人達がいる。

その人達を見ている間は少なくとも退屈はしない。

今はあの国に捨ててきたものの事を少し忘れられればそれでよかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0800s/>

最初で最後の

2011年3月31日14時55分発行